

二度目の開拓に向かう人たち

誌名	農村計画学会誌 = Journal of Rural Planning Association
ISSN	09129731
著者名	服部,俊宏 齋藤,朱木
発行元	農村計画学会
巻/号	34巻4号
巻号補足	
掲載ページ	p. 432-435
発行年月	2016年3月

農林水産省 農林水産技術会議事務局筑波産学連携支援センター

Tsukuba Business-Academia Cooperation Support Center, Agriculture, Forestry and Fisheries Research Council
Secretariat



二度目の開拓に向かう人たち

The People Who will go to the Second Time Pioneering

服部 俊宏*・齋藤 朱未**

Toshihiro HATTORI and Akemi SAITO

1 いつもの風景の中で

東北本線松川駅から松川第一仮設住宅へは徒歩 15 分ほどである。駅から何度目かの坂道を上り丘の頂上に出ると、眼下に仮設住宅の風景が見えてくる。聞こえるのは風の音と、仮設住宅のさらに奥を切り通しで抜けている国道 4 号線バイパスを走る車の音くらいで、生活音はほとんど聞こえてこない。この数年の変化は、仮設住宅の隣の区画に工場が 1 棟建ちあがったこと、工業団地の敷地外に新築の住宅が建ったことくらいである。

松川第一仮設住宅には、福島県相馬郡飯舘村から避難してきた方々が 103 世帯・172 人（2016 年 1 月 1 日現在）暮らしている。この仮設住宅は特定の行政区からの避難者で形成されているのではなく、13 行政区の人が個別に入居している。

2011 年の入居から数えて 5 度目の冬が過ぎようとしている。一見ただけではよく分からないが、他の仮設住宅同様建物の劣化も進み、補修工事が計画されている。また、村外に住宅を購入して転居する者、体調を崩して入院する者等、入居者の転出入も見られる。松川第一仮設住宅でも多いときには 200 人超の方々が暮らしていたが、この 1 年でも 5 世帯・13 人減少している。この傾向は、村全体の仮設住宅と同様である（図 1）。

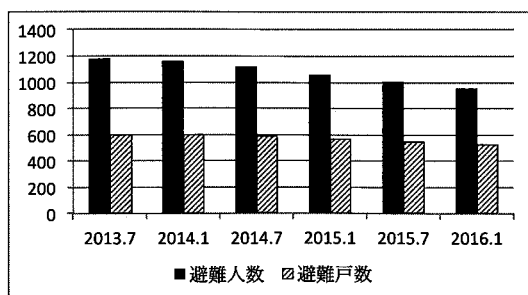


図 1 仮設住宅への避難者数
（飯舘村の仮設住宅合計、村 web サイトより）

環境省のまとめによれば、2015 年 12 月 31 日現在の飯舘村の除染の実施率は、宅地 100%、農地 50%、森林 86%、道路 45%である¹⁾。また、帰宅困難区域に指定されている 1 行政区を除く 19 行政区別のまとめでは、除染終了が 4 行政区、宅地除染終了が 15 行政区となっている。これまで二転三転してきた避難指示解除予定であるが、除染の進捗により、2017 年 3 月の避難指示解除予定²⁾をこれまでより確かなものとして感じることができるようになっている。

しかし、このような動きがそのまま、個々の避難者の将来に希望をもたらしているわけではない。むしろ、除染の進行や行政の避難指示に向けた取組が自分自身の将来にどのように影響するか捉えきれていない状況にあるように思われる。そのため、将来を考える上での与件が未定なままで、避難指示解除後に関する意思決定を迫られているような状況にもある。

本稿は、主に 2014 年度から 2015 年度における仮設住宅での活動の成果である村への要望づくりについてまとめるとともに、活動を通じて明らかになった住民の想いをまとめたものである。

2 飯舘村のこれまで

福島県相馬郡飯舘村は、阿武隈山系の中に広がる、面積 230.13km²、人口 6,209 人（2010 年国勢調査）の村である。基幹産業は農業であるが、高地にあるためこれまで幾度となく冷害に見舞われてきた。それでも、多くの努力により飯舘牛やトルコキキョウなどの特産品を生み出してきた。

飯舘村は、江戸時代には相馬藩領であり、現在の飯舘村の領域は相馬市、浪江町、葛尾村の一部と合わせ「山中郷」というくくりの中の 30 村のうちの 18 村で構成されていた³⁾。この 18 村が飯舘村の現在の 20 行政区の基礎となっている。その戸数は合計で延享年間（1744 ～

* 明治大学農学部 Meiji University

** 明治大学研究・知財戦略機構 Meiji University

Keywords：1) 原子力災害、2) 仮設住宅、3) 帰宅困難区域、4) 開拓、5) 飯舘村

1747年)には911戸であったのが、天明3年(1783年)には744戸、嘉永元年(1846年)には352戸と激減している。これは、幾多の冷害・飢饉に見舞われたからであり、特に高地で冷涼な気候である山中郷の被害は大きかった。特に被害が大きかったのが、宝暦(1754年)・天明(1783～1887年)・天保(1833～1838年)の飢饉である。このうち天明飢饉では、山中郷全体で人口5,134人のうち死亡874人、失踪1,031人、空き家480軒であった。また、天保飢饉も天明飢饉同様に水稻の収穫が皆無になるほどの大凶作であったが、天明飢饉の教訓から非常困り米などの備えの結果、餓死者は出さずにすんだとされている。それでも、相馬藩として野馬追の中止、参勤交代の延期などを余儀なくされている。

このような状況に対し、相馬藩は間引の禁止、養育料の給付などとともに、移民奨励・新軒百姓取立をおこなうことにより藩内の再建を図った⁴⁾。しかし、山中郷への移民はなかなか進まず、他郷では年貢減免が5年であったところ、山中郷では10年から場所(飯館村南部)によっては25年とされたが、効果はあがらなかった。

明治になると、18村は明治4年(1871年)に草野村他17ヶ村区会所としてまとめられ、これが現在の飯館村の領域が一つの単位となった最初であった⁵⁾。これが紆余曲折を経て、明治22年(1889年)に大須・新館・飯曾・石橋の4村に再編された。その前年(1888年)の現飯館村の領域の戸数は797戸、人口は4,342人と、現在の約2/3の人口しかない⁶⁾。この4村はその後、昭和17年(1942年)に大須・新館村が合併して大館村に、飯曾・石橋村が合併し飯曾村になった。

その後の人口の推移を図2に示す。大正9年(1920年)には6,387人、昭和15年(1940年)には8,015人と、貧しいながらも人口は着実に増加している。さらに、戦後には緊急開拓事業により約500戸が入植していることなどをうけ、戦前よりさらに人口が増加している⁷⁾。これにより、例えば飯曾村では1950年時点での総戸数

830戸のうち農家戸数680戸、うち入植が226戸となっている。入植者には地元出身の引揚者・復員者、二三男による分家もあるが、村外の出身者も多かった。例えば、山形市に生まれ、満州開拓団に参加後引揚・入植した例などがあつた。また、入植と同時に既存農家の増反もあわせておこなわれたため、農地の開墾に従事した村民は入植戸数以上に多かった。もちろん、緊急開拓事業の対象地は条件の悪い場所が多かったため、すべてが順調であつたわけではなく、高度経済成長期などに離農・他出した者も多い。

このようにして、飯館村の人口は1950～1960年代にピーク(1960年国勢調査で11,129人)を迎え、以後は減少を続けることになる。東日本大震災直前の2010年国勢調査では6,209人と、90年前の1920年の人口を下回るまで減少していた。それでも、120年前の1889年と比較すると約1.5倍の人口を維持していることになる。

3 仮設住宅での要望づくりを通して

飯館村では当初、2011年6月に公表された「まていな希望プラン⁸⁾」にあるように、「避難生活は2年くらいにしたい」としていた。しかし、現実には除染の遅れなどのために、避難指示解除の予定は遅れる方向にたびたび変更され、現在は2017年3月が予定されている。

この間、村では前記「まていな希望プラン」に始まり、現在の「いいたて まていな復興計画第5版」(2015年6月17日)まで、数次にわたり復興計画が策定され、関連した事業が実施されている。また、避難解除や帰村、様々な意味での復興に向けて、住民などによる自主的な計画づくりや実践活動もおこなわれてきた。しかし、これらの存在は、仮設住宅の人たちにとっては自分たちの将来の不安を払底するものにはなっていない。具体的には、調査の過程において、避難者の立場から見たとき、帰村の有無を判断する情報があまりにも少ないということが明らかになった。例えば、同じ行政区、同じ班の人たちが戻るのか戻らないのか。除染後の放射線量をどのように理解したらよいのか。除染後の農地で何を栽培することができるのか。復興計画が自らの将来の選択にどのように繋がるのかわからないというのである。

そのような中で、筆者らが2014年3月に開催した松川第一仮設住宅での調査結果の報告会において、行政の復興に向けた取組に依存するだけでなく、報告された調査結果を基に自分たちでできることを考えてゆこうという声があがった。そして、明治大学農学部地域環境計画研究室の協力の下で、自分たちの将来に関係することについての勉強会と、その成果を受けて自分たちにとって帰村する上で何が必要なのかを要望書として村に提出

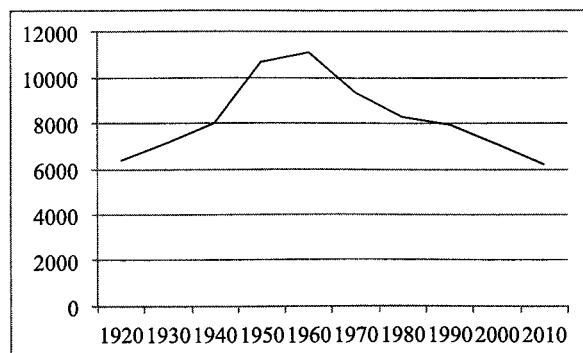


図2 飯館村の人口推移
(1920～2010年、国勢調査より)

することとした。

具体的な活動は2014年4月から始まり、聞き取り調査形式での帰村意向調査とその報告会、勉強会、ワークショップなどを経て、2015年3月に「飯館村への帰村に関する要望書」をとりまとめた。

検討の過程ではまず、要望の前提となる仮設住宅への避難者の帰村意向や希望する居住場所、将来の生活状況と集合住宅へのニーズについての聞き取り調査を60世帯60名（男性27名・女性33名、50代以下は8名）で実施した。その中で明らかになった帰村意向と帰村する・しないそれぞれの希望する居住場所を表1に示す。帰ると決めている・帰りたいと考えている方が26名と回答者の43.3%を占めている。これに対し、帰らないとしたのは22名（36.7%）、わからないが12名（20.0%）であった。その中で、居住場所については、帰村希望者では自宅とする回答がほとんどであり、帰村しないとする回答では、未定や不明が半数を占めている。帰らない・わからないとする中で村本来の生活ができるようになったら帰るかと重ねて質問したところ、帰る可能性ありが8名、悩むが7名、帰らないが12名であり、帰る場合の居住場所は全員自宅であった。また、帰村後にしたいこととして19名の方が農業・家庭菜園をあげている。

当然のことではあるが、帰る・帰りたいとする方々が目指すのは、自宅での農業がある生活の再建である。一方で、避難開始前は多世代同居により医療・買い物交通などで高齢者の生活は支えられていたが、避難指示解除後は高齢世代だけの帰村になる可能性が高い。そのため、子ども世代との同居のために帰村をあきらめる方、帰村するつもりではあるが車を運転できなくなった後の生活に不安を感じている方が多数おられる。

そこで、これらの不安を払底するためのものとして、平成27年3月に飯館村松川第一仮設住宅自治会から村へ向けて「飯館村への帰村に関する要望書」を提出した。この要望書では、「飯館村への帰村に関する要望」として、「生活環境の整備」と「収入源確保の明確化」をあげて

表1 帰村意向と居住場所（平成27年1月時点）¹⁰⁾

帰村意向		居住場所	
回答数	比率(%)	回答数	
帰る	26	43.3	自宅 23
・帰りたい			その他 3
帰らない	22	36.7	福島市内 3
			福島県内 6
			福島県外 2
			未定 6
			不明 5
わからない	12	20.0	

平成27年1月実施聞き取り調査より

いる。

「生活環境の整備」については、①病院や買い物に不便なく出かけることができる交通・買い物手段の確保、②みんなが集える場の整備、③見守り隊の拡充が具体的にあげられている。これは、現在想定される帰村環境では買い物や病院等にも不便を感じざるを得ない状況にあること、長期的な視点から考えると自立した生活が困難になった際に村内に安心して生活できる環境が必要だと考えられることから導かれたものである。

同様に、「収入源確保の明確化」については、①農業による収入確保の可能性、②風評被害に対する対策の可能性、③その他の収入源確保に向けた取り組みの可能性があげられている。これは、帰村後にどのような手段で収入確保が可能なのか、特に若者の帰村意向にも影響を及ぼすものとして考えられたものである。

このうち、そのためのワークショップの開催など、最も時間をかけて検討したのが、みんなが集える場の整備についてである（図3）。ワークショップでは、2段階での検討を実施した。

まず、「今、帰村に当たって村民が考えていること、心配していること」として、帰村に対する不安と、今の生活（仮設住宅）の良いところ・良くないところを確認した。これは、それまでの議論で、本意ながら始まっ

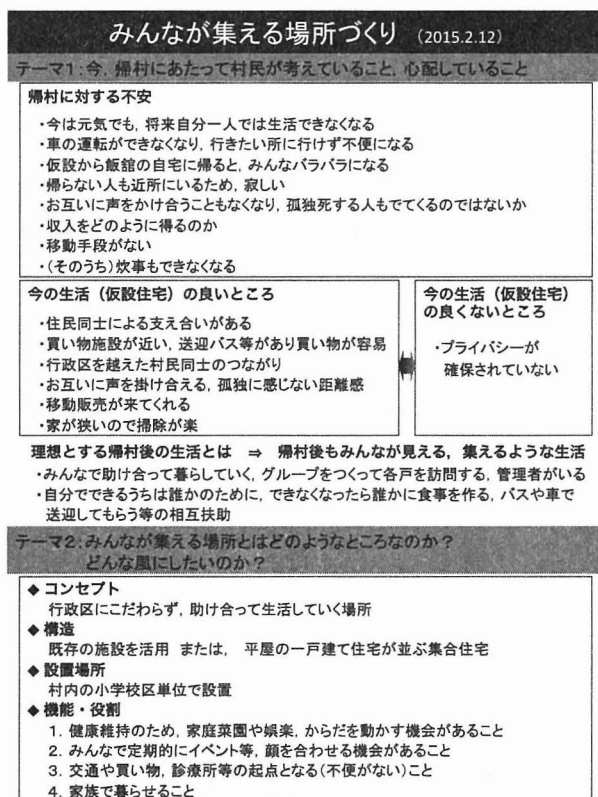


図3 みんなが集える場の整備
(飯館村への帰村に関する要望 付録2を改訂)

た仮設住宅での暮らしであるが、新しい暮らしの中で、これまでにない新たなつながりの形成、孤独を感じない距離感など、将来にわたって大切にしたいような良いところが感じられたからである。議論の中では、「仮設住宅のつながりをそのままにして村に帰れたら良いのに」という意見が出たほどである。それらの検討の結果導き出された理想とする帰村後の生活とは、「帰村後もみんなが見える、集えるような生活」である。そこには、例えば管理人の常駐など、仮設住宅の良さを活かそうとする発想も見られる。

では、みんなが集える場所とはどのようなところなのか？どんな風にしたいのか？が次のテーマである。そこは、村外からの来訪者も含めた集いの場所であると共に、相互扶助の機能も有する場所である。コンセプトとなるのは「行政区にこだわらず、助け合って生活していく場所」であり、既存の施設の有効活用などで最低でも小学校区単位での設置が想定されている。元気なうちは分散する自宅から集う場所であり、周りの人たちを支えるための活動の拠点となる場所である。そして、自宅での自立が困難になっても、この場所での支援をうけることにより村での生活を保障する機能を果たす場所となる。

「行政区にこだわらず」がコンセプトに含まれたのは、仮設住宅で異なる行政区からの避難者が新しい良好な関係を築いてきた実績が反映されていると考えられる。

4 開拓の決意

松川第一仮設住宅への避難者の方々と帰村について話をしていると、「開拓」という言葉が何度となく出てくる。仮設住宅への避難者の中には、自身が戦後緊急開拓の入植者である方、その子・孫である方がおられる。また、入植者でなくても、農地の増反を経験した方、飯館牛などの新しい農業への挑戦を続けてきた方など、飯館村の厳しい立地条件を克服して今の生活を築き上げてきた人たちである。彼らは、帰村を「二度目の開拓」とも捉え、挑戦しようとしている。

この二度目の開拓を、自身の子どもや孫と一緒に挑戦できればうれしいであろう。しかし、それを若者世代に強要しようとする姿勢はない。もちろん、開拓の目的は自身の子どもや孫たちのためではあるが、自身の後について、必ずしも血縁にこだわらない方も多いように感じる。それは、すでに支援のために飯館村に関係している人かもしれないし、まったく新規のＩターンにあたる人なのかもしれない。自分たちの開拓の想いを理解し、飯館村での暮らしを選択してもらえればそれで

よいのかもしれない。「みんなが集える場」には、外から来た人が宿泊できる機能も盛り込まれている。そこで想定されているのはもちろん、自身の子や孫たちであるが、それだけではなく、これまで同様にさまざまな交流や支援に関わる人たち、新たに飯館村に関心を寄せる人たちである。多様な人たちとの関係の中で新しい飯館村を創ろうとしているのである。

5 再びいつもの風景の中で

避難指示解除の予定が１年後に迫る中、避難者の方々はこれまでにない難しい選択を迫られることになる。それと共に、つらい避難生活を共にしてきた仮設住宅というコミュニティも変わってゆくことになるであろう。

松川第一仮設住宅は、村に帰る・帰らないに関わらず、そこで暮らしている人たちにとってはかけがえのない場所になっている。すでに「帰ってくる場所」にもなっているのである。避難解除後は、「二度目の開拓」に対する支援と共に、仮設住宅で培われた新しい関係を避難者一人一人の今後の人生にどのように活かしてゆくのか考える必要があるだろう。

引用文献

- 1) 環境省：福島県飯館村の除染進捗情報、〈<http://josen.env.go.jp/area/details/iitate.html>〉, 2016.1.29, 2016.1.31.
- 2) 原子力災害対策本部：「原子力災害からの福島復興の加速に向けて」改訂、〈http://www.meti.go.jp/earthquake/nuclear/kinkyu/pdf/2015/0612_02.pdf〉, 2016.1.30 閲覧.
- 3) 飯館村史編纂委員会：飯館村史 第1巻 通史, 飯館村, 福島, 185-190, 1976.
- 4) 飯館村史編纂委員会：飯館村史 第1巻 通史, 飯館村, 福島, 245-256, 1976.
- 5) 飯館村史編纂委員会：飯館村史 第1巻 通史, 飯館村, 福島, 288, 1976.
- 6) 飯館村史編纂委員会：飯館村史 第1巻 通史, 飯館村, 福島, 306, 1976.
- 7) 飯館村史編纂委員会：飯館村史 第1巻 通史, 飯館村, 福島, 306, 1976.
- 8) 飯館村：まていな希望プラン、〈<http://www.vill.iitate.fukushima.jp/saigai/wp-content/uploads/2011/06/d498f50d759126fa99f36a472b7874d4.pdf>〉, 2011.6.22, 2016.1.31.
- 9) 飯館村：いいたて まていな復興計画第5版、〈<http://www.vill.iitate.fukushima.jp/saigai/wp-content/uploads/2015/05/6f7995d3bdda4b69be489a99522a70e6.pdf>〉, 2015.6.17, 2016.1.31.
- 10) 服部俊宏、齋藤朱未：原子力災害避難者の帰村に向けた課題、農業農村工学会誌, 83 (8), 21-24, 2015.

Keywords: 1) Nuclear Disaster, 2) Temporary Housing, 3) to Return to the Hometown, 4) Pioneering, 5) Iitate-mura